

ドクター・ハザマの



バイタルサイン塾 34

医師と協働して“患者と併走”する意義

ファルメディコ株式会社
 大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
 医師・医学博士 狭間 研至

患者がランナーなら、医師はコーチ では、薬剤師は？

医師は、患者さんというマラソンランナーと併走していくコーチのようだとつくづく思います。コーチは、物理的にも精神的にもそばにいて、その時々自分の状況をチェックしてくれます。何か困ったことがあったり、つらい状況になったりしたときには、声をかけると適切な指示や処置をしてくれます。

また、場合によっては、患者さん自身も気がついていないような不調のポイントも、すばりと指摘してくれるかも知れません。バイタルサインや、血液検査、レントゲンやCT、MRI、エコーなどの画像検査のデータは、そのためのいろいろな情報をコーチである医師にもたらししてくれますから、医師も熱心に生涯研修に励みます。しかし、それは自分のためというよりは、むしろ「患者さんというランナーが無事にゴールできる」という目標を達成するためなのだと思います。

一方、現在の調剤業務に特化した薬剤師は、所々にある給水所で、ランナーにお水やドリンクを手渡すスタッフのように見えているのかも知れません(図)。

もちろん、この仕事は重要です。長い道のりを走る上で、必要な水分やミネラル、栄養素を、コーチである医師が選び準備してくれたものを受け取ることはと

■図



© Kenji Hazama, M.D., Ph.D.

ても大切です。走り抜けていくランナーが、受け取りやすいように渡すにはテクニックもいるでしょうし、苦し

そうなランナーにはやさしい一声をかけてあげたいと、一瞬のコミュニケーションに工夫を凝らすこともやりがいの一つになるでしょう。タイムロスがないようにと準備の手技に磨きをかけて、万全の体制で待ち構えることも大切なことです。

給水スタッフと重なって見える薬剤師の立ち位置 真に患者を支えるためには何をすべきか

しかし、ランナーは給水ポイントの人に感謝はしているけれども、そのドリンクの中身はコーチが考えたものだし、慌ただしく通過するポイントで誰が渡してくれたかは覚えていないというのも致し方ないことでしょう。その一方で、もし間違ったドリンクを渡されたり、ドリンクを渡し損ねたり、はたまた、準備に手間取って待たされたりしたら、怒りを感じるでしょうし、その原因を追及すべく、あとで本部に乗り込んでくるかも知れません。

奇しくも、調剤業務に専念していると「薬剤師の顔が見えない」というコメントがしばしば出てきますが、そのこととこの給水ポイントのスタッフの立ち位置は、妙に一致するのではないかと感じています。誤解のないように申し上げますと、給水ポイントはマラソンにおいて重要です。しかし、そこでのスタッフの仕事のみが、薬剤師の仕事としてマッチするものではなくってきているのではないかと思います。

では、何をするか。やはり、医師と同様、患者さんと併走しながら、患者さんの状態を把握し、調剤してお渡しした薬の効果がきちんと出ているのか、副作用は出ていないのかをアセスメントしながら、医師と協働して患者さんを支えていくことが重要でしょう。この文脈の中で、薬剤師にとってのバイタルサインやフィジカルアセスメント、さらには、共同薬物治療管理という概念を考えていただきたいのです。